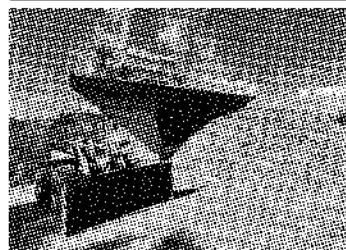


発電時のCO₂・焼却灰

コンクリート骨材に再利用

バイオマス
パワーテクノロジー

バイオマスパワーテクノロジーズ(BPT)、三重県松阪市、北角強社長)は、バイオマス発電所から排出する二酸化炭素(CO₂)と焼却灰をコンクリートの骨材に再利用する。HPC沖縄(沖縄県浦添市)などと共同で骨材を開発。2025年大阪・関西万博のパビリオンでの採用を狙う。さらに2025年



に松阪市内で稼働予定のバイオマス発電所で、骨材プラントを25年以降に併設する計画で、CO₂排出量を実質マ

イナスにするカーボンのネガティブの発電所の実現を目指す。

BPTは同社が代表社員となったパワーエイド三重合同会社(三重県松阪市)で、ホクト(長野市)の三重ぎのこセンター(三重県多気町)から排出される使用済み培地を燃料としたバイオマス発電

所を25年1月に稼働予定。発電出力1990キロワットで、15年間にわたって同センターへ電力を供給。再生可能エネルギー固定価格買取制度(FIT)を利用しないバイオマス発電所として運営する。

この発電所で発生する焼却灰とCO₂を資源化する。発電所建設地に隣接した土地を確保済みで、焼却灰を原料とした骨材に発電所から排出するCO₂を吸着するプラントの建設を計画。それをHPC沖縄が開発した超薄肉コンクリート「ハイブリッド・プレスドレスト・コンクリート(HPC)」に利用する。焼却灰は、BPTが松阪市内で稼働済みの他のバイオマス発電所などからも供給する。

ホクトとの連携に加え、バイオマス発電所と骨材プラントを併設することで、バイオマス発電で課題となる燃料の集材と、発電した電力の供給先、発電に伴う廃棄物の最小化、

CO₂排出の実質マイナスを達成するモデルプラントと位置付ける。

また、同骨材を使つたHPCの実用化第1号として万博での採用を目指して交渉中。同技術の環境貢献効果を万博でアピールし、量産化への弾みとしたい考えだ。